

【事例紹介】

シンガポール国立大学

語学教育研究センター日本語プログラムの交流活動

Exchange Activities in Japanese Language Programme,
Centre for Language Studies, National University of Singapore

シンガポール国立大学語学教育研究センターインストラクター 北井 佐枝子

KITAI Saeko

シンガポール国立大学語学教育研究センター准教授 ウォーカー 泉

WALKER Izumi

(Centre for Language Studies, National University of Singapore)

キーワード：海外の大学との交流、パディシステム、プロジェクト型学習、協働学習

1. はじめに

シンガポール国立大学語学教育研究センターでは13言語のコースを開講しており、その中でも日本語プログラム(以下、CLS日本語プログラム)では毎学期700名程度の学生が日本語を学んでおり、日本語は最も人気のある外国語である。日本語1から6に加えてビジネス日本語や新聞読解コース等が開講されている。2017年8月に入学した学生より日本語の副専攻が認められるようになったが、日本語の主専攻はなく、それぞれ専攻を持つ学生が選択科目として日本語を履修していることが大半で、そのため、日本語学習は容易ではない。主専攻の学業が多忙になって途中で日本語学習をやめてしまう者や卒業直前にしか選択科目をとれない学生も多い。その一方で、日本語学習に非常に熱心で初級から上級まで継続する学生も数多く存在する。そのような学生は自分の専門と日本語能力の両方を活かせる有能な人材に育っている。

そのように上級まで継続する学習者を育てるための要となっているのが「交流」である。交流活動は学習者の意欲を高め、長期的な学習者を育てる上でも、日本との親交を深める上でも、また、近年急増している企業からの需要に応える人材育成のためにも極めて重要である。本稿ではシンガポール国立大学の日本語学習者の日本への送り出しとCLS日本語プログラムへの受け入れの2つの側面から

日本語学習者と日本との交流について述べる。

2. シンガポール国立大学（NUS）から日本への送り出し

シンガポール国立大学の学生を日本へ送り出す主な方法として下の三つがある。

2-1. 大学、学部、学科レベルの交換留学

大学レベルでの交換留学は、現在、九州大学、京都大学、慶應義塾大学、東京大学、東京工業大学、東北大学、大阪大学、名古屋大学、早稲田大学の9大学となっており、留学後はシンガポール国立大学の単位に交換できる。シンガポール国立大学の学生であれば日本語の学習の有無にかかわらず応募ができる。また、学部学科のレベルの正式な交換留学先として上記以外の大学もある。

2-2. 日本研究学科からのプログラム

日本研究を主専攻、副専攻とする学生は大学レベルのパートナー大学だけでなく、国際教養大学、関西学院大学、東京外国語大学、北海道大学、立教大学、立命館大学にも交換留学ができる。そのために日本学生支援機構（JASSO）、日本商工会議所、広島シンガポール協会、平和中島財団、三井化学、三菱商事、文部科学省などから奨学金制度も用意されている。

そのほか、多少の費用がかかるが、夏季特別コースとして九州や東京のフィールドトリップを主としたコースも開講しており、これは選択科目として日本研究科の学生でなくても履修できる。

また、単位としては認められないが、広島でのインターンシップ、広島と静岡のホームステイプログラムなどの短期プログラムもあり、日本研究学科の学生が優先されるが、日本研究学科以外の学生でも参加できる場合がある。

2-3. 語学教育研究センター（CLS）日本語プログラムからの短期留学プログラム

CLS日本語プログラムではイメージョンプログラムとして、3週間の短期プログラムに学生を送り出している。最近まで早稲田大学、同志社大学、東京農工大学の短期コースもCLS日本語プログラムで募集、推薦していたが、現在では玉川大学と順天堂大学だけになってしまった。いずれの大学も奨学金が得られず、学生が全額負担しなければなくなったためである。さらに数年前までは国際交流基金、日本国際協力センター、地方公共団体による助成金や奨学金で、多様な交流プログラムへ送り出すことができた。しかし、最近は助成金や奨学金がほとんどなくなり、日本研究専攻以外の学生は、日本への短期留学や交流プログラムに参加できる機会を失っている。CLS日本語プログラムの学習者の9割近くが日本研究以外を専攻しているため、非常に残念なことである。

なお、内容については、CLS日本語プログラムからの短期留学プログラムはフィードバックに基づい

て年々改善されており、学生から好評を得ている。例えば、日本語を学ぶ他国の学生と知り合うことも有意義だが、日本人と交流する機会が短ければ学生の満足度が下がってしまう傾向がある。満足度が高いコースではバディシステムがあって、生活上安心だったり、日本語の学習にボランティアの日本人学生の継続的なサポートがあったりしている。午前中に日本語学習、午後に何回か文化活動や交流活動、休日に遠足等があり、学習のサポートだけでなく、文化活動も日本人学生とともに参加し、滞在期間中は継続的に交流できることも満足度を上げる要因となっている。

CLS 日本語プログラムで上級コースまで履修した者の中にはこのような短期留学の経験を持つ学生が非常に多く、日本での交流が日本語学習継続の一因となっていることは間違いない。残念なことは相手の大学側が受けていた奨学金が打ち切られ、そのようなコースの存続ができなくなったことである。日本研究専攻の学生は日本研究科の豊富な奨学金制度や優遇されたプログラムで何度も日本との交流機会があるが、日本研究が専攻ではない日本語学習者にとっては日本への短期留学の機会が激減してしまった。それは継続的な日本語学習者、ひいては有能な人材育成の大きな機会損失である。よって、CLS 日本語プログラムでは日本国内で夏季短期日本語プログラムが開催できる新たな提携大学を模索している。可能性がある大学はぜひご連絡を願いたい。

3. CLS 日本語プログラムでの受け入れ

先に述べたとおり、日本研究専攻以外の学生が日本への短期留学や交流プログラムに参加できる機会は限られている。そこで、CLS 日本語プログラムのコースでは、日本からの訪問者をゲストとして招いたり、いっしょに出かける機会を作っている。特に、日本語3以上では、シンガポールの日本語コミュニティと協力して毎学期コースの中で何某かの交流会を行っている。例えば、日本人小学校や早稲田渋谷シンガポール校など、毎年交流を重ねている教育機関もある。

交流会を成功させるためにはその場限りの交流だけではなく、事前によく準備をする必要がある。ウォーカー（2018）は特にタスク遂行型や協働型の「プロジェクト型学習」が日本語学習そのものの楽しさや意義を実感でき、日本語学習をできるだけ長く継続するために成果をあげていると述べている。

3-1. 日本の大学や地方公共団体からの訪問者との交流

もっとも頻繁に行われている形は日本の大学生たちが大学や地方公共団体が主催した短期研修でシンガポールを数日間訪問、CLS 日本語プログラムの授業に訪問するパターンである。高校生やボランティアのご年配グループを受け入れたこともある。日本語学習者たちも訪問者もそれぞれが事前に準備したタスクを発表したのち、ディスカッションや質疑応答を行う。当方の目的が日本語学習なので、訪問者にも日本語でお願いしているが、訪問目的によっては訪問者が英語で発表することもある。授

業以外の時間にもキャンパス案内をしたり、学食で食事をしたり、シンガポール観光で出かけたりすることもあ

る。プロジェクト型学習では、現実的なタスク、例えば、案内状やお礼状の作成など十分な準備をすることが重要である。中上級のプロジェクトとしてはシンガポールのお国事情や社会問題、初中級のプロジェクトとしては大学、趣味の紹介などがトピックに上がることが多い。学生の日本語のレベルを見極め、どのようなタスクを課し、対面時にどのような活動をするか、活動後にどのようなリフレクションを行うか、などを慎重に計画した上で実践することが重要となる。また、それらの活動は学習者が主体的に行うのが最も理想的である。それが可能となれば、学期終了後も学生同士で連絡をとりあったり、お互いを訪問しあったりするなどして、その後も親睦が深まっていくからである。交流がこのようなきっかけとなりうるか否かは、双方の教師または担当者の力量にかかっていると言っても過言ではない。

また、2012年から2015年まで早稲田大学がSENDプログラムを実施し、日本語教育を専攻する日本人や日本語母語話者に近い外国人大学院生をインターンとして3週間受け入れた（浜崎ほか2016）。大学院生たちがトピックを決めて日本語の特別模擬授業を行ったり、自分が得意な文化活動的な授業を行ってもらったが、教師視線ではない若者の教育実践は当方の学生たちにも新鮮で、有意義な交流となった。それらの教育実践後はCLS日本語プログラムの教師がフィードバックを与えたが、このような現場の教師からのフィードバックは日本語教師を目指す大学院生にとっても意義のあるものであったと思われる。しかし、SENDプログラムも奨学金が継続できなくなったとの理由で4年で終了してしまい、残念である。

3-2. シンガポールの日本関連機関や在留日本人との交流プロジェクト

シンガポールの在留日本人は3万人を超え、世界でも3番目に大規模な日本人学校がある。中でも日本人小学校と早稲田渋谷シンガポール校はシンガポール国立大学に隣接しており、交流は10年以上毎年続いていて、プロジェクトの型も安定してきている。最近では日本語3のコースで小学生を相手にキャンパスのパンフレットを日本語で作成、グループで大学キャンパスを案内、日本語4で高校生を相手にお出かけプラン募集のポスターを作成、グループごとにシンガポールの町に出かけ、事後発表会を行っている。また、高校の学園祭や英語のスピーチ大会に参加して日本文化やクラブ活動を体験したり、スピーチ大会の審査を手伝うなどの訪問交流も行っている。

また、定期的ではないが、日本人会の「日本語を話そう会」などをゲストとして招いたり、学生が選んだ日本語の本を推薦するビブリオバトルを行い、審査に在留日本人を審査員として招き入れることもある。そのような機会は学生自身が作る場合もあるが、ほとんどが教員の伝手である。今後は学習者が主体的に交流相手を探せるよう支援をしていくことも重要であると考え

3-3. シンガポールの企業訪問と日本からの大学生との協働

ビジネス日本語のコースでは、学習コミュニティを醸成することを目的とした協働型プロジェクト学習を行っている。シンガポールの日系企業を訪問してインタビューを行い、学期末には企業人を招待して発表会を行うというプロジェクトである。数年前からは、そのような活動を日本人大学生との協働学習として実践している。異文化コミュニケーション能力や協調性を高めるなど、グローバル人材に求められる社会人基礎力の向上も目指している（ウォーカー2018、ウォーカーほか2018、2016）のである。日本人学生たちは学期の初期のころからメールやSNS等でやりとりをし、短期間のシンガポール訪問中に企業訪問を行い、帰国後もオンラインでやりとりをして発表原稿作成などを支援する。ビジネス日本語の学生たちは敬語を習い始めたばかりの段階であるため、企業訪問をして企業人の前で発表をするというのは極めて大きな挑戦であるが、日本人大学生と協力しあうことにより、さまざまな困難も乗り越えられる。日本人学生たちにとっても、グローバル企業を訪問する機会を得られるばかりでなく、シンガポール人学生との対面学習やコミュニケーションを通して、批判的思考や問題解決の方法を学べるなど、お互いに有意義な経験となっているようである。中には異文化による軋轢を経験することもあるが、お互いに深くかかわることで空港では涙の別れとなり、学期終了後も交流が続くような絆も生まれている。しかしながら、このプロジェクトは学習プロセスが長いだけに参加者のマッチング、協働の活性化など学習コミュニティ構築には教師の適度な教育的介入が必要である。

3-4. 課外活動

日本語1や2のコースは学習者の人数が300名前後もあり、公平な交流機会が保ちにくいことやまだ日本語学習を始めたばかりで日本語でのコミュニケーションが困難なことから、定期的な交流は行っていない。しかし、英語がある程度できる日本人学生となら、初級でも交流活動は可能であるため、訪問依頼がある場合は、有志を募り、授業時間以外で交流活動を行うようにしている。

さらに、交流活動を増やすために、かつては授業時間外に「おしゃべり会」と称して初級から上級までの日本語学習者から有志と在留日本人を集めて文化活動を行っていたこともあるが、教員の退職で継続が困難となった。

ほかにも過去には日本人学校教員のシンガポールのお宅に週末にホームステイをさせてもらう活動が数年続いていたが、教員数が大幅に減らされたり、双方の担当教員が離任したことなどにより、現在は行っていない。担当者が変わっても存続するためには、お互いに無理のない交流を実施することが肝要であると思われる。

学生の自主的な活動としては、日本研究学科の元で学生が組織する日本研究会というクラブが存在

し、毎年ジャパニーズ・カルチャラル・フェスティバルという催し物を学内で行っており、学生や在留日本人も集まってくる。また、日本研究会の下には茶道部、舞踊部、音楽愛好会、箏アンサンブルも存在し、それぞれ個別の活動を行っている。日本研究会では仲介業者の紹介で日本人学生にシンガポールの観光案内をするアルバイトも請け負っている。日本研究会の多くのメンバーは必ずしも日本語学習者というわけではないが、日本に興味を持ち、日本文化を愛する学生の集まりで、それぞれの分野で交流も行っている。

筆者北井は、「KotoKottoN」という箏アンサンブルを2009年から始めた。大学のクラブ組織としては日本研究会の下にあるが、メンバーのほとんどがGLS日本語プログラムで日本語を学んでいる。これまでにフィリピン大学音楽学部の箏を主専攻、副専攻する学生をシンガポールに呼び寄せてワークショップをしたり、オーストラリアの箏フェスティバルにメンバーを自費で参加させたりしていて、多くのメンバーが各地の箏奏者とフェイスブックでつながっている。今年は東日本大震災のあとに建てられた陸前高田市のシンガポールホールで箏演奏、ホームステイもさせてもらった。地元の交流への熱意と復興を応援する会社の支援があって一部の自己負担で実現できたことであるが、志があるところに交流は生まれ、そこから絆が育っている。

4. おわりに

GLS日本語プログラムでは、本稿で述べてきたような多様な交流を実践してきた。それを通して実感していることは、交流は学習者の意欲を高め、長期的な学習者を育て、企業からの需要に応える人材育成のために極めて重要であるということである。従って、今後もさらに促進できるように努めていきたい。

今後の課題としては、日本への送り出し機関の拡大に新たな掘り起こしが必要であるということである。日本への短期留学や交流プログラムは、シンガポールでの交流に勝るインパクトがあるからである。そのためには、現在実施しているプログラムによりよい学生を集め、対外的にアピールすることも大切であろう。

また、GLS日本語プログラムで受け入れる交流活動についてはタスク遂行型プロジェクトを終わらせるだけでも十分な価値があると思うが、協働学習により学生間、教師間の絆を深めていけば一層有意義な活動となる。それには学生の負担を考慮しながら、まず双方の教師がお互いの学生をよく知った上で綿密に企画を立て、学習者主体の活動を促進していく方法を検討していく必要がある。

さらに、日本語話者との交流だけでなく、日本語学習者同士で「学習コミュニティ」を構築、醸成していくことも考えられる(トンプソン木下千尋2016, 2017)。ここ数年は、日本語1の学期末に、中上級の学生を招いて日本語学習の方法や経験を語ってもらったり、箏アンサンブルのメンバーに箏演奏をしてもらったりしてきた。先輩の話は後輩の日本語学習の継続を促すことに役立っているよう

である。よって、それらの活動を学期中に活性化する方法を確立し、「学習コミュニティ」の構築を促進することにより、日本語教育のさらなる発展につなげていきたいと考えている。

参考文献

- ウォーカー泉 (2018) 「プロジェクト型学習を成功に導く『協働』とは―日系企業訪問プロジェクトに基づく一考察―」, 『東南アジアにおける日本語教育の研究と実践』2018年ホーチミン市日本語教育国際シンポジウム, pp. 33-39
- ウォーカー泉・高木裕子 (2016) 「グローバル化に向けた人材育成のための「二国間協働学習」デザインと教師の役割」, 『シンガポールビジネス日本語教育国際研究大会論文集』, pp. 25-36, <<https://drive.google.com/file/d/0B3yBvHwajj21cnpsS084UlpQUk/view>>
2019年9月23日アクセス.
- ウォーカー泉・森川洋子・伊藤明子 (2018) 「シンガポールの日本語教育事情 ―グローバル人材育成に向けた取り組み―」, 『日本語教育学会―世界の日本語教育―』 <<http://www.nkg.or.jp/wp/wp-content/uploads/2018/05/sekai-singapore0501.pdf>>
2019年9月23日アクセス.
- トムソン木下千尋編 (2016) 『人とつながり、世界とつながる日本語教育』くろしお出版.
- トムソン木下千尋編 (2017) 『外国語学習の実践コミュニティ参加する学びを作るしかけ』ココ出版.
- 浜崎謙・ウォーカー泉・大塚陽子・北井佐枝子 (2016) 「シンガポール国立大学における SEND プログラムの実践―語学教育研究センター日本語プログラム―」, 『早稲田日本語教育学』2016年12月第21号, pp. 187-192, 早稲田大学大学院日本語教育研究科.
- 「順天堂大学国際教養学部 NEWS―シンガポール国立大学からの留学生のバディをしました」2019年7月2日付 <<https://www.juntendo.ac.jp/ila/sp/news/20190702-06.html>>
2019年9月23日アクセス.
- 「玉川の教育―シンガポール国立大学の学生が見た日本とは? 日本語短期研修で今年も来日した学生による日本語発表会が行われました―」2019年7月12日付
<https://www.tamagawa.jp/education/report/detail_16308.html>
2019年9月23日アクセス.
- 「CLS Japanese Language Programme, NUS」『Facebook』
<<https://www.facebook.com/JapaneseLanguageProgrammeNUS/>> 2019年9月23日アクセス.
- 「e-RAION―History―」 <https://courseware.nus.edu.sg/e-raion/photo_g.htm>
2019年9月23日アクセス.